ず

不破涼音

未然形接続

◎打消：〜ない

見ない言わない聞かない、といった風にひたすら打消し。
「パソコンなどあらず（パソコンなんてない）」みたいな感じで。
こいつで注意すべきは活用。全部「ず」かな？→連体形已然形→解せぬ……
驚きの活用である。どっこいよくよく考えると
　ぬ（連体形）→そしらぬ顔　　ね（已然形）→やらねば
・・・の様な言葉に見られるように、現代語にちまっと残っている。
結び付けつつ覚えよう。

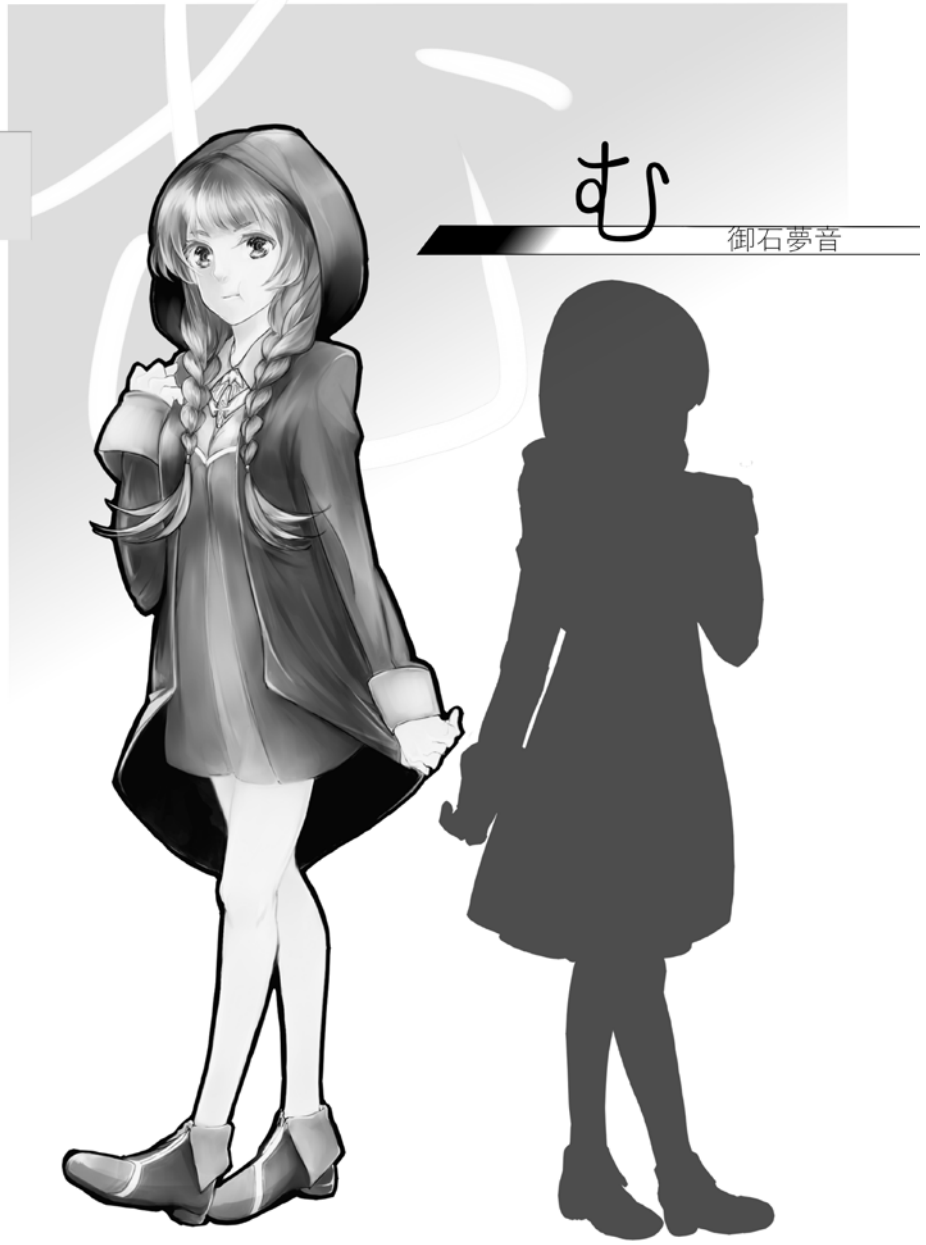
「ざらざり〜……」の活用の方は実は「ず＋動詞あり」が合体したものが正体。
そのため活用語尾は**アリ**と同じになる。
　未然形：ず＋あら→ざら　連用形：ず＋あり→ざり・・・

製作めも

未然形接続を擬人化するにあたって共通のコンセプトとなっているのは、**非現実っぽさ・アイドルっぽさ**。和服ではなく**洋服**を着せることは最初に決まっていました。「打消＝意味をひっくり返す」要素から、**大きな鏡**を持たせています。
また、**イメージカラーを黒**にすることで打消っぽさを出しました。打消ってなんか黒そうじゃないですか。ふっははは！ 黒く塗りつぶすぞ！ って感じが。
「ず」は様々な語にくっつくことができるため、**古文の中で度々登場**します。語に付き従い、せっせと働く……よく働く**メイドさん設定**いけるんじゃね？ という発想からメイドの女の子ビジュアルが誕生しました。メイドさんを侍らせることは夢のまた夢。非現実感も満載です。黒髪ロングは吾等の趣味。よく出てくる割に文中に埋もれがちで目立たなかったりするので「**小柄な子**」という設定もあったり。

む

御石夢音



未然形接続

◎意志：～しよう　**◎推量**：～だろう　**◎婉曲**

現代語で意志を表す「～しよう」の先祖。
働かむ→働かう→働こう……と変化し今に至る。
こいつは已然形活用が「～こそあらめ」等のように「～こそ～め」の形で出没する。とりあえず已然形の「め」が来たら「こそ」の結びだろうと考えていい。
あとの活用は「む」のみなので、もはや仕留めたも同然。勝った。

☆婉曲：とは

受験では「～ような」で訳せと言われるが……？
・・・薄い意味、なくてもいい意味だと思っていればいい。

～実際に現代語でやってみた～

わたしともあろう者が⇔わたしである者が
（古）あらむ

「う」が無くても意味はほとんど変わらない。
これは古文においても一緒なんですよ！！　ええ！！！
とうわけで、意味をとるために読むだけなら婉曲「む」は無として扱っていい。
……とはいえテストや受験では、**自分はこの助動詞が何か分かってますアピール**をしなければならない。婉曲「む」がひっそりしてたら、大人しく「ような」等で訳すのが吉。とにかく大切なのは意志・推量**じゃない**と分かっていること。
「～しよう」「～だろう」と**訳さない**ことがポイントとなる。

☆文中の出現位置と意味

む。	文末なら：**意志・推量**というちゃんとした意味
む　。	文中に埋もれていたら：**婉曲**＝意味は無視してもいい

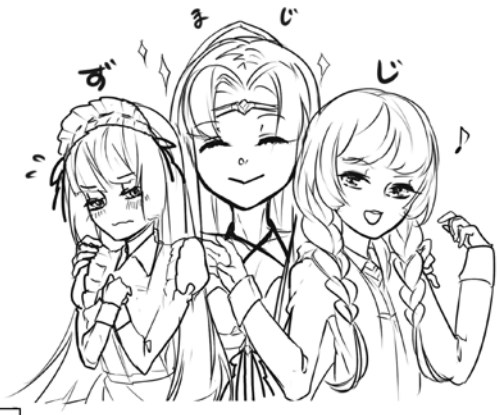
そのため・・・
文末以外の「む」は無視しても意味はあまり困らない

未然形接続
◎打消意志・打消推量：「む」の否定版

現在でも「負けじと～……（打消意志：負けたくない）」というような表現で残っている。
活用は「じ」しかないので気にしなくて良し。勉強したくないでござるという人に優しい、シンプルかつストレートないい子である。

製作めも

文中では**ひっそりと**意味が薄くなり、文末では**はっきりと**した意味を持つ「む」。まずは**フードを目深にかぶって**体育座りしている姿や、文中で存在感が薄くなっていることに対し**む**っとしている表情が思い浮かびました。文末でははっきり！ 感を表すために、「**1 人のときはフードを外してきりっと**する」という設定をそこにプラス。これらの要素から擬人化していった結果、こんな女の子が生まれました。むむ、かわいい。未然形接続の助動詞のため、衣装は**非現実感非日常感**を意識しました。「ム」という文字をモチーフに取り入れてデザインを考案した部分もあります。
「じ」は意味が「む」の**裏返し**なため、服装や髪形などは「む」と近くした上で色を変更することにしました。結局打消イメージの黒をもってきて、「む」の**黒 ver.** に。ちなみに「ず」のイメージカラーも黒です。「ず・じ・まじ」の打消三人衆は**イメージカラーを黒**にすることでちょっとした統一感を持たせています。真っ黒に打消してやろうかな！ って人たち。



じ
御石慈音

まし

御石真白

未然形接続

◎反実仮想：もし～なら～なのに　**◎ためらいを含んだ意志**：～しようか

基本反実仮想として登場するが、たまにためらいを含んだ意志のことも。多くは「ましかば～まし」という構文で登場するので、こいつだけは覚えておこう。

☆「ホントはそうじゃないけど」という気持ちのかぶさった「む」

「まし」の持つ意味は、実は↑の通りだったりする。たとえば・・・

・普通の推量「む」
　→真実はどうかわからないけど、真実を知りたくて真実はこうだろう、と推量する。
　　↑
　　↓
・「まし」は、“ホントはそうじゃない”ことが分かったうえで妄想
　→現実に反することを「仮にこうだったとして」と想う。
　　これが反実仮想――

・“ホントにそうと決めつけたわけじゃないけど”という意志→ためらい
　行かまし→行こう……かな……やめよっかな……って感じ。

製作めも

「まし」は仮定条件句があると反実仮想に、ないとためらいを含んだ意志となります。ちなみに反実仮想では「こうだったらもっと楽しかったのに……」と現実をゴミとする妄想以外に「こうでよかった違ったらやばかった」と現実ばんざい！ な妄想もあったり。これらの要素から、**妄想癖**があって**優柔不断**で、**仮定条件句がいないと**ハッピーなことを考えられない内気でネガティブな女の子が誕生しました。**くるんと内向きの髪型**は内気でネガティブな性格をイメージ。**伏し目がち**な表情も同じく性格面からきています。多くは仮定条件句を伴って用いられるため、ぬいぐるみの「仮定条件句ちゃん」を**肌身離さずぎゅっと**しています。このこがいないとすぐにいじけて物事を惜しみます。未然形接続のため、服装は**非現実的**な雰囲気。配色は**青**を中心とした**寒色系**です。また、「まし」は時代が下るとただの意志推量となります。それに合わせて擬人化の「まし」も、「成長すると内気イメージな部分が取れ、露出が多めの服になる」という設定が。

き

背丸貴子

連用形接続
◎過去：～た

活用：せ／○／き／し／しか／○
誰がどう見てもいかれた恐怖の活用。助動詞ってやつはどいつもこいつも……。どっこい逆に言ってしまえば活用さえ攻略すればこっちのもの。こいつばっかりはもう覚えてしまった方が早い。連体形「し」については「あり し 日々」「封印され し ○○」なんて言葉で現在も残っていたり。

製作めも

「き」は助動詞軍団の中でもトップクラスに**古くから存在**するものだったりします。**古い助動詞**・意味が純粋に「**過去**」である。これらの要素から連用形の統一イメージ**和テイストの中でも特に古い感じ**にしようとなり、結局奈良朝までさかのぼりました。服装のモデルとなったのは**奈良朝の男性装束**です。実は**男装**しているという、助動詞擬人化の中でもちょっと変わった設定を持たせています。「き」の**活用が特殊**なのは一目瞭然。男装設定によって活用の特殊性を表しました。また、「き」を攻略するにあたって壁となるのはやはり活用の覚えづらさ。どうしたものかな……と考えた結果、鹿型のリュック『**鹿丸**』を背負わせることにしました。奈良だし。

けり

貫道花梨

連用形接続
◎過去：～た
◎（会話・歌中では）詠嘆：～だなあ
（歌）「～雪は降り ける 」：×雪が降った（過去）
○雪が降り積もっているなあ（詠嘆）

活用語尾は「動詞あり」と一緒。

製作めも

「けり」は「き」に比べると新しい助動詞ですが、**過去**を表すという点では同じ。そのため基本コンセプトは「き」と揃えました。こちらの服装のモデルは**奈良朝の女性装束**。雅ですなあ。和歌や会話文中では詠嘆で使われることから、**歌がうまい設定**があったりします。こぶしの効いた演歌とか。

連用形接続

◎完了：た、～てしまう　**◎強意**

完了と過去の違いとかよく分からんのです……と思うかもしれないけれど、訳し方はどっちも同じようなもんなのでこの際細かいことは気にするな精神でいこう。大切なのは「この助動詞の意味はなんですか？」という問題がきたとき、**過去ではなく完了**と答えられること。

～完～

☆強意：とは

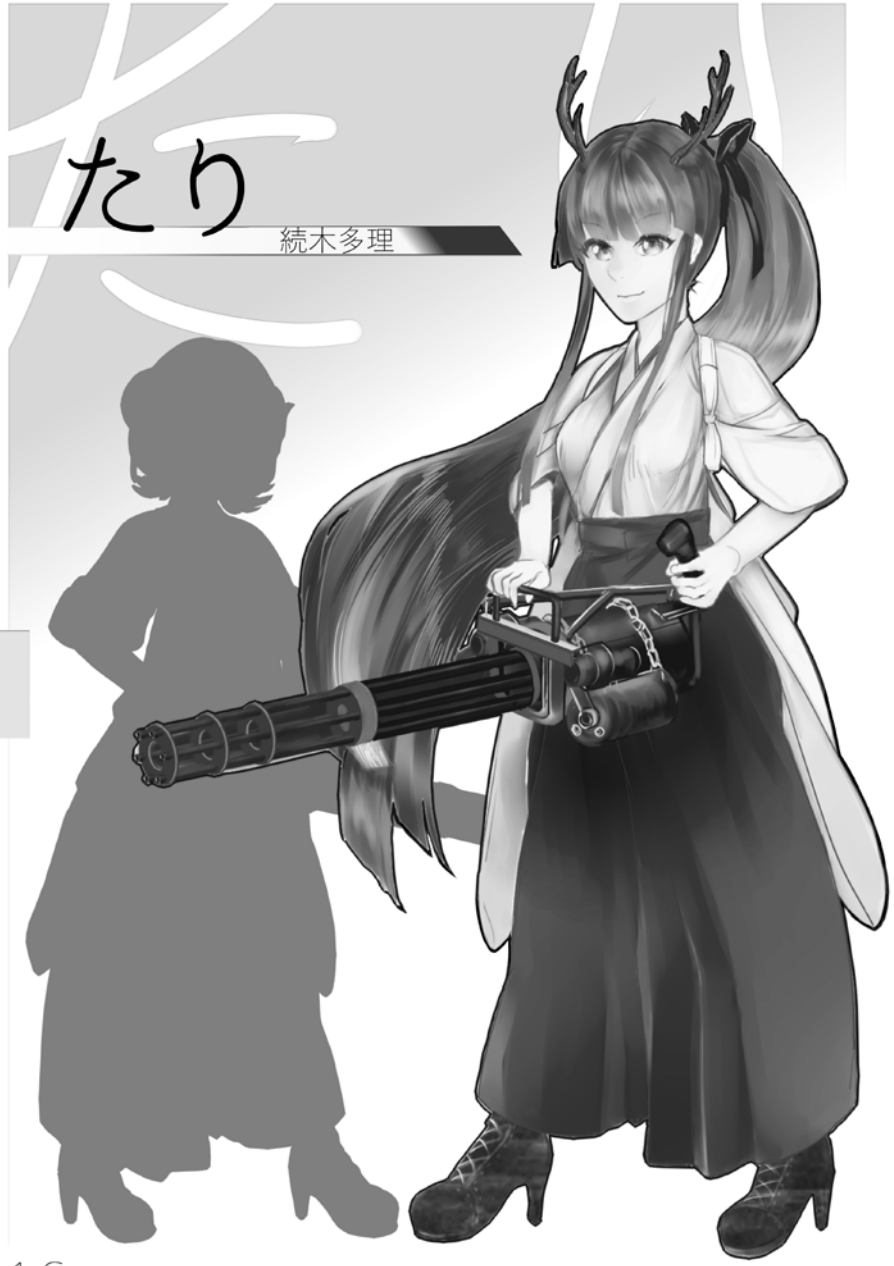
「む」「べし」など意志推量の助動詞と一緒の場合、「終わった」という完了ではなくただ意味を強めるだけになる。この場合完了で訳さないよう注意。

よくある形：てむ・なむ・つべし・ぬべし

	【ぬ】	【む】	
風吹き	な	む	
×吹い	た	だろう	
○吹く	(強意)	だろう	→ 吹くに違いない、きっと吹くだろう

製作めも

高校古文では気にしなくていいのですが、「つ」「ぬ」は基本一緒だけれどよくよく見ていくと**様々な面で対照的**だったりします。「つ」は意志的な動詞につくのに対し「ぬ」は非意志的な動詞、とか。というわけで擬人化する際に中心のコンセプトとなったのは**オモテとウラ**の関係。そのためこの２人は**双子**となっています。「つ」は**明るく活発でショートカット**、「ぬ」は**落ち着いて純和風**な女の子などなど、色んなところでばっちり対照。また、「完了＝物事をそこでぶった切る！」というイメージから**刀を装備**。「む」など推量系の助動詞と一緒の場合は完了ではなく強意を表すため、「**刀（完了）を捨てて一緒にはしゃぐ**」なんて設定もあったりします。連用形接続のため服装は**和テイスト**。配色も**暖色系**にしました。



「たり」も「り」も、ともに・・・
◎完了：た、～てしまう　**◎存続**：～している

「たり」は普通に**連用形**。「り」の方は何段何形に接続かということより
「～e り」「～e る」のように、**上の音が「e」**になると覚えてた方がいい。
「花を見て詠める歌（花を見て詠んだ歌／詠んでいる歌）」みたいな感じで。
活用語尾は動詞ありと一緒。

～完～

☆存続もいるぞ！
基本的には完了の意味で登場するが、「～している」で訳した方がいい場合もある。現代でも一見完了に見えるけど意味は「～している」となる語が存在する。
例えば「変わった人」という言葉。別に「あの日を境に、彼は変わってしまった――……」なんてドラマは背景に無く、普通に「常日頃変人認定されている存在」つまりは「変わっている人」となる。

☆現代語の可能表現と区別！
現代の感覚で読める、読めるぞ！ となっていると思わぬ落とし穴に引っかかることも。得意のアドリブでは誤魔化せないのが古文。以下「り」において起こりやすい間違い。

・現代で「飛べる」→可能「飛ぶことができる」
↑
↓
・古典で「飛べる」→完了・存続「飛んだ／飛んでいる」

現代語「飛べる」と古文「飛べる」は、キャベツとレタス、オバマとうちの親父の関係同様ぱっと見似ているけど全く違う存在。ここで華麗に決めてこそ古文マスターというもの。「～e るってなんか可能っぽい」と人生はギャンブル精神で訳すのではなく、これはこれ！ でしっかり区別しよう。

実は現代語でも、「迷える子羊」という言葉で「り」が残っていたりする。
ここら辺のイメージを持ちつつ可能との区別を乗り切ろう。

迷える子羊　→×迷うことのできる子羊／迷う能力を持った子羊
→○迷った／迷っている子羊

・・・次のページに続きたり。

製作めも

連用形接続の助動詞なので服装は**和テイスト**に。せっかくなので人類の浪漫巫女服を着用していただいております。存続感・長く続いている感を出したかったので**袴や袖は長め**。「たり」も「り」もほぼ一緒の意味なので、ビジュアルは**近いもの**にしました。「り」は訳の際可能との区別をしっかりつけてほしいので、「**迷える子羊**」を思い出しやすいよう**羊ツノ**を装備。それに合わせて「たり」は**鹿ツノ**を装備しています。「完了は物事に区切りをつけて終わらせる→物事をぶった切る！」という発想から、先に生まれていた「つ」「ぬ」は刀を持っています。それに合わせて「たり」「り」にも何か**武器**を持たせようとなりました。「たり」「り」は存続の意味もあるため、せっかくならば武器に**存続感**を持たせたい。何か長時間続いて、かっこいい武器……と考えた結果**ガトリング砲**を持つことになりました。
ちなみに「たり」のツノは**1年に1回**落ちます。ツノが落ちると完了っぽさあるじゃないですか。「ツノ落ちたり！（角☆落☆完☆了）」って言いながらツノが落ちます。ただそれだけです。

終止形接続

◎意味：非現実にかかわる意味全てを表す万能選手

活用は形容詞的。意味は可能・意志・推量・義務・当然・命令・適当・予定などなど。「滅ぶべし」って言ったら「滅びよ……」って意味なる。
ここでイメージするべきは“道理としてそうだ”ということ。人として行うべき道理が各意味の根本にあり、そこから意味が広がっていく感覚。例えば・・・
・道理として行くべきだ→だから行こう（意志）
→だから実際行くだろう（推量）→だから行ってくれ（命令）
といった感じ。「べし」は「道理の世界では成り立っている。だからこうなる」系の意味全てを伝えられるすごいやつ。
現代語では「～するべき」だったりの形で残っている。
ちなみに・・・方言の「行くべえ」などの「べえ」は、「べし」の生き残り。
行くべし　意志→「オラ、行くべえ（私が行こう）」
推量→「アイツも行くべえ（あの方もお行きになるだろう）」

べし

べしひめのみこと

終止形接続

◎意味：べしの否定版

「べし」が「道理としてこうなるぞお前ら」的な意味を担っているなら、「まじ」は打消意志・禁止などなど「道理として絶対こうならんぞ」的な意味を担当。
「〇〇にあるまじき台詞」とか、現代語で使う場合も。

製作めも

特殊領域終止形接続で、万能選手で、道理の世界で……という要素から、結局人間離れした**神様感満載**の一番強くて凄い感じになりました。ちょいとばかし露出が多いかもですが夏の海もこんなもんじゃないですかね。「まじの意味はべしの裏返し」については両者の**色を反転**させることで表現。「**べし**」は**白**、「**まじ**」は**黒**。「まじ」については黒ってことで、「ず・じ」と一緒に打消三人衆を結成しています。近づくと打ち消される。真っ黒に。

まじ

まじひめのみこと

伝聞なり

耳有ナリ

終止形接続

◎伝聞・推定：〜そうだ、〜ようだ（実際は翻訳不能）

伝聞推定「なり」のナ行音は、現代の**音（ね）・鳴る**とかと繋がっていたりする。この辺からも伺えるが、伝聞推定のなりは**耳から得た情報**であることがポイント。

☆伝聞・推定：とは

高校古文での訳は「ようだ」だけど、別に「どうやら〜のようだ」と推測しているわけではない。「耳から得た情報だよ」っていうことを示すために「ようだ」が使われているだけ。

例えば四天王の最弱が戦っている隣の部屋で残りの四天王が待機していたとする。で、隣の部屋から「グアアアア」と声が聞こえてきたら「あ、あいつ負けたわ」と思い残りの四天王は「奴がやられたようだな…」という会話をする。ここでは別に負けたかもしれないとか推測は無くて、四天王の最弱は負けたという確信はある。「負けたという判断を耳から得た情報で致しました」という表現をするために、伝聞推定なりが使われている・・・

・・・とかなんとか長ったらしい説明が必要になるほど、伝聞推定なりは現代語で訳が難しい。正直だるいので、それっぽい「ようだ」という訳に高校では落ち着いている。

- 耳から入ってきたことが言葉による情報なら→伝聞
- 音そのものなら→高校ではそれを推定と呼ぶ

☆断定なりと伝聞推定なり

Q. こいつら意味のほかに何か違いはありますか。

A. 接続する動詞の活用とか。見てくださいこの語尾ー！

- する（連体）なり
  →「なり」の上が連体形になっている……これはっ……断定！
- す（終止）なり
  →「なり」の上が終止形になっている……これはっ……伝聞推定！

連体形接続
◎断定：〜だ、〜である

現代でもマイクテストで「本日は晴天なり」って言う場面が存在するし、
「我こそは〇〇なり！」って自己紹介する。それと同じである。
意味に関しては相手に正体を明かすとき「ボクだ！」ってばばんと叫ぶイメージ。

製作めも

2つの「なり」を擬人化するにあたって、3つの要素がベースにありました。
①この2つは形は同じだけど全くの別物→**似て非なる**もの設定
②伝聞推定は「耳から得た情報」→**ケモノ耳**枠を使って耳感を出す
③断定は伝聞なりに比べ文中によく登場する→断定は**しっかり**した感じ、
伝聞は**ちょっと駄目**な娘な感じ

これらの要素に各々の趣味を混ぜ昇華させた結果が以下の通りです。
お納めください。

断定なり
狐をモチーフにし、きりっとしたかっこいい断定感を演出。ケモノ耳をつけないことで「伝聞ではないアピール」をしつつ、しっかり化けられている要素をふんだんに取り入れました。衣装や髪形、動物コンセプトといった点で伝聞推定との共通点も抜かりなく取り入れているため、似て非なる存在要素へのアプローチも完璧です。今日はいつもよりかっこよく決めたい・昨日とは違う私になりたい・うどん派である。そんな貴女へ。

伝聞なり
狸をモチーフにし、断定と比べどこか隙のある印象に。ケモノ耳をしっかり残すことで化けきれていない天然のドジっ娘を演出しました。衣装に「めり」と共通点を持たせることで終止形接続要素をプラス。全てにおいて怠慢はありません。今日は頑張りすぎない私でありたい・特別な場所へ羽ばたきたい・そば派である。そんな貴女へ。

断定なり

狐決ナリ

めり

目有メリ

終止形接続

◎推定：〜みたいだ、〜ようだ

見た感じこう！ という場合の推定。同じく終止形接続の伝聞推定「なり」が「耳から得た情報」であるのに対し、「めり」は「目から得た情報」で推定する際に登場。

例えばある部屋で四天王の最弱が床に這いつくばってピクピクしていたとする。最弱にまだ戦う意志があったとしても、これを残りの四天王が目にしたら「あ、こいつ負けたわ」と判断し「奴がやられたようだな…」という会話を始めてしまう。ここでの「ようだ」は「めり」。
ちなみに、「めり」のマ行音は現代語の**目**、**見る**とかと繋がっていたりする。

製作めも

目から得た情報のため、イラストに**目を強調**した姿を取り入れました。ポーズしかり眼鏡しかり。あざといかわいい正義！「めり」の接続は終止形で、未然とも連用とも違った**特殊領域**に位置します。これをどう擬人化の要素に取り入れるか？ と考えた結果、未然の未来・非現実アイドル感と連用の過去・和テイスト感両方を取り込んだ**中間形態**になりました。